
春よ、来い。

茅野 遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春よ、来い。

【Nコード】

N7662D

【作者名】

茅野 遼

【あらすじ】

皆川春香は、高校二年生。一学年上の先輩に、仄かな恋心を抱いている。先輩が、卒業してしまうまでの二週間の、ちょっとだけ切ないお話し。

（前書き）

少し、実験的な作品です。似非文学作品、とでも言うジャンル（そんなもの、無いですねA^^）だと思っただければ幸いです。

今回は、喫煙シーンなし、飲酒もなし、非行少年少女は出てきません。純粹に（？）、普通の女子高生が主人公です。

ご一読、お願いいたします。

まだまだ、冷たい空気が身を刺す様な、二月中旬。 春香は庭に植えられている白梅が、ちらほらと咲き始めている風景を見つける。

「週末、雪が降っていたのに……」

何となく嬉しい気分になり、春香の口から小さな呟き声が漏れた。

家屋の隣に据えられた納屋なやから自転車を出して、手袋とマフラーを確りと身に着け直した。

「まだ、冷たいな」

軽く身震いをして、春香は自転車を漕ぎ出した。

皆川みながわ 春香は、高校二年生だ。 名前は、四季の中で一番好きな

季節は春だという母親が、付けてくれた。

彼女が生まれた年に、記念として庭に植えられた白梅は、毎年この季節になると、芳香を放ちながら、凜として咲き誇る。

その白梅を見て、春香は幼い頃から、友だちが気付くよりも少しだけ早い時期に、春の訪れを見つけてきた。

春香は、小学生時代から仲の良い友人・実莉みのりと一緒に、自転車通学をしている。 今朝も、いつも通りの十字路で、実莉が待っていてくれた。

実莉の姿を見つけて、二十メートルも離れた所から、春香が大きな声を出す。

「おはよう、実莉！ 梅、今年も咲いたよ！」

自転車を漕ぎながら、片手をハンドルから放して大きく手を振る。

「おはよう、春香！ 今年も、もう咲いたんだ。……春だね」

キキー！ と、両手でハンドルを握り直した春香の自転車が、ブレーキ音を上げる。

「まだ、寒いけどね」

実莉の間近で、春香の自転車が止まる。

春香の言葉に相槌を打ち、実莉も自転車へ跨り直した。

待ち合わせ場所から、片道二十分をかけたの通学時間中、二人は話しながら自転車を漕いでいく。

田舎町の通学路は、間に畑あり、田んぼありの、冬の朝には、吹く風が冷た過ぎる道行きだ。いつも、寒さを吹き飛ばす様な気持ちで、大きな声で話しをする。

今は、一学年上の先輩達が、後二週間で卒業式を迎える時期。

冷たい風を切って走りながら、実莉が聞いた。

「ね、春香！ どうするの？」

「どうって？」

「先輩のこと」

春香の返事は聞こえない。

実莉の言う先輩は、春香と仲の良かった先輩の事だ。

二月初旬、春香は彼から、初めて卒業後の進路を聞いた。その日から口もきかないままで、二週間以上を過ごして来た。

実莉は構わずに、話を続ける。

「バレンタインデーにも、チョコ渡さなかったんでしょ？」

「……別に、付き合ってた訳じゃないし」

春香の呟く様な声は、はつきりとは聞き取れなかった。

「週末からテストだね。イヤだな」

これ以上、聞かれたくはなくて、春香は話題を逸らした。

「知らないからね、後悔したって」

実莉はそう言って、少しだけ表情を歪めていた。

□

□

□

授業中。教室の、ほぼ真ん中にある自分の席で、春香は、黒板に白いチョークで書かれた文字を、ただ、ノートへと書き写している。

授業の内容は、頭の中には入ってこない。

春香の手が止まり、ボンヤリとした視線を、中空に彷徨わせる。

朝、実莉に言われた事を思い出していた。

高津^{たかつ} 和輝^{かずき}は、春香の中学時代からの先輩だ。その頃には、それほど親しかったわけではなかった。

春香が同じ高校に入学したとき、彼から声をかけてくれた。

「今年の新入生は、藤咲中出身が去年より多いんだな」 そう言う
って。

それから、少しずつ仲良くなった。

春香が中学時代に所属していた軟式テニス部は、運動部のジョギングコースの脇に、テニスコートがあった。

テニス用のスコートは、年頃の少年達の目を引くものだ。どうしても、気になるのだろう。

それで、昔から藤咲中学女子軟式テニス部の生徒達は、校内でも人気があったらしい。だからと言って、部員全員がモテていた訳ではないが、運動部の男子生徒たちから、顔を覚えて貰い易かった。

高校で、先輩から声をかけて貰えたのは、きっと、そのお陰だろうと春香は思った。

高津は、剣道部に籍を置く。剣道は中学時代から続けていた。

春香は、良く高津の試合を見に行っていた。

高校へ入学したての頃は、希望と同じくらいの大きさで、色々と不安もあった。

そんな時に、同じ中学出身の先輩が、何気なくかけてくれた言葉は、やはり嬉しかった。少しだけ、気になってしまった。

自分から声をかけたくらいだ。高津も春香の顔は、確りと覚えていた。試合の度に自分を応援しに来てくれた事は、嬉しいと思っただ。

春香が一年、高津が二年の冬休み前には、高津の試合後、一緒に帰宅をするようになっていた。その頃から、二人は付き合っている様だと、身近な友人達が噂をし始めた。

あの頃、高津が春香に言ったことがある。

「変な噂、されるようになってしまったな。……悪い」　そう、謝られた。

二人で試合会場から、路線バスを使って帰宅をする、道すがらだった。

謝られた時、春香は、心に小さな棘が刺さった様な、チクリとした痛みを感じた。

『あの時……。もう、先輩のこと、好きになっていた……。』
けれど片思いだったことも、その言葉で同時に知ってしまった。

彼も少しは、自分の事を気にしてくれているのではないかと、思い始めていた頃だった。

高校に入ってから春香は、特に部活動に参加する事もなかった。中学時代にやっていた軟式テニス部は、この学校には無かった。硬式テニス部はあるが、軟式でさえ、同級生達に比べて上達が遅かった自分が、硬式テニスなどやっても無駄だろうと思った。

部活に、必ず籍を置かなければならないと言う様な校則も、この学校には無かった。

春香は、持て余してしまった時間を潰すために、趣味として編み物を始めてみた。始めたばかりの頃は、上達したら先輩に、マフラーでも編んであげようかとも思っていた。

彼が、喜んでくれるのなら。目標にもなる。
そう、思っていたのだが……。

特に好きでもない、彼女でもない女の子から、手編みのプレゼントを貰うのは、男の子にとっては、気が重い事なのかも知れない…。

そんな風に考えて、頑張って上達させ様と言う前向きな気持ちも、逸れてしまった。

春香と高津は、仲の良い先輩と後輩。 そんな関係のまま、一年半近くが過ぎてきた。

去年の秋、高津が部活動を引退してからは、彼の試合を見に行く事もなくなった。

高津も、受験勉強が忙しかった。
それからは、一緒に帰る事もなくなってしまった。

時間を合わせて、仲良く帰宅をする程の関係でも無かった。

考え事をしている内に、授業時間終了のチャイムが鳴る。 委員長の号令がかかり、春香もその声に合わせて、椅子から立ち上がった。

□

□

□

毎朝、春香と一緒に登校する実莉は、文芸部に籍を置く。今日は、その活動がある日、月曜日だ。文芸部は、週に二日だけ活動している。毎週、月曜・金曜の二日間。

勿論、実莉は入部する時に、春香を誘ってくれた。けれど春香は、文章を書くことには、それほどの興味を覚えなかった。

放課後になり、春香は一人、自転車置き場へと向かっていた。ふと上げた視線の先に、彼の姿を見つけた。

自分と同じ所へ向かう、生徒達の後姿に隠れて、それまで気付かなかった。

友だちと楽しそうに話しながら歩いている、目の前の男子生徒が、大笑いをした弾みで、身体を大きく横へと揺らした。

その頭の間に、高津の横顔を見つけてしまった。

そして、高津の言葉に笑顔を見せながら、並んで歩いている女生徒の姿も、春香の視界に飛び込んだ。

その瞬間。

ドキリと大きな音を上げて、心臓が脈打つ。春香は、自分の鼓動に驚いた。

目の前の景色は、止まってしまふ。少しだけ、クラリと目眩が襲う。

……鼓動は、早くなっていく。

身体の奥の、奥。

深い、深いところから、込み上げてきた感情に、春香は気付いてしまった。

『……私、どうして』 悲しいの？

春香の片思いは、随分、前から分かりきっていた事だ。

『どうせ、好きになってももらえないだろうから……』

それなら、他の子達よりも、ちよっとだけ仲良く見える先輩との関係のままで……、そのままで、十分だから……』

そう思う事で、満足しようと思った。

硬い とても硬い、蕾の様 じつと、寒さを堪えていた、

庭の白梅

『春、いつ来るのかな……？』 何故だろうか。 春香の心に、
浮かんだ言葉。

気持ちを無理やり押し込み込める事で、春香の心は、あの花開く前の
蕾と、同じ様に……。

……硬く、硬く、硬く……。

それでも、庭の白梅は、今年も咲いた

春香の心は、あの片思いを思い知らされた頃のまま、まだまだ、冷たい空気に触れるのを、怖がっている……。

□

□

□

高津と並んで歩いていた女生徒が、春から、彼の大学での学友となる相手だと言う事は、一週間が終わるよりも早くに、春香の耳にも入った。

のんびりとした田舎町を出て、慌ただしく、不安も多い都会へと、夢を持って歩いて行こうと言う時。

同郷、同校出身と言う絆は、どれ程の魅力となって、その瞳に映るのか……？

自分の事に置き換えて考えてみる時間は、春香には、持て余す程にあった。

その所為か、春香は最近、塞ぎ込みがちに見える。

実莉は心配そうな顔をして、春香にもう一度、問いかける。

「ねえ、春香。本当にいいの？ 同じ大学行くからって、二人が付き合っているとか、決まらないでしょ？」

問われて、春香は。

「……わからないよ」　小さく、首を横に振る。

週末・土曜日の帰り道。途中で春香の自転車の後輪が、パンクしてしまった。

春香に付き合って、実莉も自転車を押して歩く。

「わからないって……。それを確かめるためにも、思い切ったほうが、いいと思う」

「……わからないって、そう言うことじゃ、ないよ」

あの二人の関係が、どうと言うことではなかった。

「もう、イヤになっちゃう。あと5分、パンクしなかったら、家についていたのに！」

話を逸らして、春香は悔しげな顔をする。

『こんな所で、パンクなんて、……。まるで、私みたい』　先輩達が、卒業してしまうまで、あと、一週間。

少しイラついている様な春香の雰囲気、実莉は小さく、息を吐いた。

「もう、時間、あんまり無いよ？」

「……そうだね」

悔し涙が、少しだけ春香の目に滲んできた。

足の運びが、止まってしまった。

二、三歩、先に進んで、実莉の足も止まる。

「春香？ だいじょうぶ……？」

一番、悔しかったのは、何？

「……実莉。私、どうしたいんだろう……？」
「それは、……春香にしか、分からないよ」

悲しかったのは、どうして……？

二人の会話が止まってしまふ。
ゆっくりと、春香の足が、また進みだす。

いつもの十字路で、二人は別れた。

先の曲がり角で一度、自転車を止め、軽く振り向いた実莉に、春香は小さく手を振った。

実莉が、自転車に乗って走り去っていく後姿を、少しだけ見送った。

自転車を押して、漸く到着した家の庭で。 春香の白梅は、今を盛りにと咲き誇っていた。

その枝は、真っ直ぐ空へと 元氣よく、無数の小枝をピンと立てて

ほの白い梅花の群れは、我勝ちにと、可憐さを競うかのように

□

□

□

日曜日。春香は自室で、久し振りに編み物のテキストを開いている。気晴らしのつもりで、軽い気持ちで眺めていた。窓の外から不意に響いてきた、大粒の雨音にびっくりして、南側のサッシ窓を開く。

さっきまでは確かに明るかった空へ、真っ黒い雨雲が広がっていた。少し遠くの空には、青空も覗いていると言う、奇妙な空模様。

バラバラバラ！ と、家屋隣にある納屋の屋根に、賑やかな音が響きだす。

「霰だ……」^{あいで} びっくりしたまま、呟いてしまった。

昨日、パンクした自転車のことを、思い出した。修理をして貰わなければならなかったのに、まだ賑やかな音を上げている、トタン屋根の納屋の中だ。

もう一度、視線を空へと動かして、少し離れた場所に覗いている、青空を確かめた。

霰が雨に変わり、その雨も上がり、再び太陽が顔を出してから、春香は外へ出た。パンク修理をもらうため、自転車を納屋か

ら出した。

庭の白梅が、水滴をポトリと落下させて、花弁をフルフルと震わせている。

春香はその様子を見て、ホッとした気分になった。散らなくて良かったと思った。

冷たい霰にも負けない、凜とした強さ　白梅の象徴する
心は、忍耐

清楚で可憐な小さな花は、寒い寒い冬を越えて、毎年、一番に春を知らせてくれる。

その枝には、少しだけ蕾を残している。先に咲いた花が、一枚、また一枚と花びらを落とし始めた頃、新しい花が、後を追いかけて咲き始める。

その頃、漸くその香りに、気付く人たちもいる。

『今度の土曜日。先輩が、卒業しちゃう……』
自転車を押しながら、春香は考える。本当に、このままでいいのか？

悔しかったのは、彼が進路を教えてくれたのが、遅かったから？

自分よりも仲良しの、彼のクラスメートが、一緒に笑っていたから？

『……悲しかったのは、……高津先輩の隣で笑っていたのが、私じやなかったから？』

まだ、遅くないのかな……？ でも、どうせ……。

それでも、時は刻まれて行く。

春の嵐が吹き荒れた日曜日から、三日が過ぎた。満開だった庭の白梅は、四割ほどは散ってしまった。新しい蕾が咲いて、七分咲き頃の景色に近い。

卒業式まで、あと三日。

近所の家の庭に植えられている、桃の蕾が、色を持ち始めている。登校時間、その様子を見つけた。

梅が終われば、次は桃 桃が終われば、次は桜

空気も徐々に、暖かくなってきた。

□ □ □
その朝は、桃花の蕾が、少し綻^{ほころ}んでいた。

三年生は、制服の胸に、『祝・卒業』 そう書かれたリボンを飾る。

「何となく、これは恥ずかしいな」 そう言つて、高津は、リボンを軽く指で弾いて、春香に、久し振りに笑顔を見せている。

二人は正門前近くで、向かい合わせて立っている。
周りには、名残を惜しむように語り合っている、卒業生達や、それを見送る在校生達。

門柱の傍らにある桜の蕾は、まだ固い。

何を、どう言えば良いのかは、纏まらなかった。 ただ、このまま、彼の声も聞けず、笑顔も見られないままでサヨナラをする事だけは、嫌だと思った。

「……あの、先輩。 ……卒業、おめでとうございます」
少し俯いたまま、高津の顔を正面から見る事ができずに、春香は祝いの言葉を告げる。
「ありがとう」

素直に頬を綻ばせて、高津が礼を言う。

春香は次の言葉が、中々、出てこない。

「……なんか、久し振りだな。皆川と話するの」
視線を斜めへと動かして、高津が言いかけた。
「……そうですね」

少し強い春の風が、二人の間を吹き抜ける。どこからか、名残の梅香が、風に乗って渡って来た。

「……梅の匂いがする」 春香の呟き声に、高津の眉が軽く上がった。
「梅？ 鼻がいいんだな。おれには、判らないけど」

春香の頬が、微妙に綻んだ。はにかんだ様な笑顔がこぼれる。
梅の香りが、春香の心に少しだけ、勇気をくれた。……ほんの、少しだけ。

「先輩。一人暮らし、するんですか？」
「そうなるよ。引越しの準備、明日から始めないとな」
「そうですか。……あの、」

あと少しの勇気があれば。次の言葉は、違っていたのかもしれない。

「……メール、してくれますか？」
漸く出てきた春香の言葉に、高津が少し首を傾げる。
「皆川、携帯、持っていたっけ？」

春香は慌ててしまう。ほっぺたが赤くなってしまった。

「あ、あの、……お母さんに、相談します……」

耳まで赤くなって俯いてしまった春香を見て、高津が小さく笑った。

「わかった。アドレス、教えるよ。携帯、持たせてもらったら、教えてくれよ?」

頷いた春香に、高津が小さく付け足した。

「良かったよ。話し、できて」

春香は、まだ赤い顔を少しだけ持ち上げて、高津の顔へ、おずおずと視線を向ける。

「二月の初めから、口、きいてくれなかったから。嫌われたかと思ってたよ」

他に、何も言えなくなった。小さな声で、「ごめんなさい」それだけ、漸く伝えた。

高津は近くの友人にペンを借りて、胸のリボンを外して、メールアドレスを書いた。

離れた所に居た友人から声をかけられて、高津が返事をしている。アドレスの書かれたリボンを春香へ手渡して、小さな笑顔を見せて、踵を返した。

友人の元へと行きかけて、少し先で、高津が振り向いた。

「皆川!」

呼ばれて春香が、小さく首を傾げる。

「試合、ずっと見に来てくれて、ありがとう！……じゃあな、元気で！」

手を振って、行ってしまった。

春香は高津を見送って、小さく頭を振ってみた。

『……どうして、涙が出てきちゃうんだろ……？』

あと、もう少しの勇気があれば……。

俯いて、じっとしたまま動かない春香の近くへ、実莉がそっと近づいた。

「……ちゃんと、言えた？」

実莉の問いかけに、春香は小さく首を横に振る。

「……そっか。でも、頑張ったんだね」

春香は、親友の肩を借りて、小さくすすり上げた。

□

□

□

庭の白梅が名残りの花を、ほんの一輪、二輪

近所の桃花は、満開の時を迎える

桜が満開になる頃には、あの人は、遠い空の下へと……

《 終 わ り 》

(後書き)

お付き合い、ありがとうございました。 お時間ありましたら、感想、評価などもお待ちいたしております。 2008・3・1 感

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7662d/>

春よ、来い。

2011年1月22日03時08分発行